少人数教育の「教育効果」とカリキュラム開発に関する研究(1)

A Study of Educational Effect by Development of Curriculum for Small Size Cllasroom(1)

松浦　善満　MATSUURA Yoshimitsu（教育学部）
梅本　優子　UMEMOTO Masako（和歌山市立宮北小学校）
西村　充司　NISHIMURA Mitsuji（附属小学校）

本研究は、和歌山大学教育学部附属小学校の少人数学級における教育効果に関する継続的研究である。従来、少人数学級による効果は、教師の負担が軽減されるか、子どもへの指導がより行き届くことが一般的に指摘されてきた。しかしながら、本研究ではそれらの指摘に止まらず、さらにカリキュラム開発など学校改革に連動する教育効果が可能であることを検証した。本実践研究が開発したカリキュラムは、「附属小学校・和みカリキュラム」として１・２年生の生活科において継続的に実践され、保護者からも評価を得ている。また評価委員を外部招聘し、本実践研究の有効性を明らかにしている点にも特徴がある。

キーワード：少人数教育、少人数学級、教育効果の検証、カリキュラム開発、外部評価

はじめに

和歌山大学教育学部附属小学校は、複式学級は定数16名（１学年８名）の３学級、単式学級は定数40名の各学年３学級の、計21の学級編制をとってきた。

従来の40人学級では、主に以下の点で特に課題を感じる職員が多かった。

①子ども１人ひとり、また活動の１つひとつに目が行き届きにくい。
→個別指導が必要かどうか、１人ひとりの学習活動に目が行き届きにくいため、見落とすことがあったり、また授業時間内に個別指導が終えられなかったり、個別の細かな学習指導を充実することが困難。
→日直や係、給食や清掃当番についても同様に目が届きにくく、その活動に対する指導を徹底し、活動を活性化することが困難。

②子どもと一緒に過ごす時間の確保がとれない。
→日々の音読や漢字練習などは、朝提出されたファイルやノートをその日のうちに点検し返却する。そのため、いわゆる休憩時間が点検のための時間として重要となる。先の個別指導や以下に記す子どもや保護者への対応もあり、ロングの休憩でも子どもと一緒に遊ぶこともままならない。

③子ども・保護者対応に時間が費やされ、教材研究の時間がじっくりとれない。
→人数が多ければそれだけ子どもの怪我や病気、また子ども同士のトラブルも多くなる。事象によっては当事者である子どもたちの話にじっくり耳を傾け、事実を明らかにしながらねばり強く指導を行うことが必要となる。

また同時に、保護者対応についても同様で、しっかりとした事実に基づいて誠意のある応対が求められる。したがってロングの休み時間や放課後をそのための時間に充てる機会が多くなる。

そこで、平成19年度より、第１学年単式学級入学児童は各学級30人とし、いわゆる少人数教育をスタートさせた。

先に挙げた、40人学級における負の部分を補うという消極的な理由によるばかりではなく、少人数の利点を生かし、より充実した教育を実現していくための試みである。

1．本研究の目的

1．1．研究の目的

本研究はこれらの特性を生かすとともに、改定された指導要領の趣旨を踏まえたカリキュラム開発、ならびにその教育効果の実践的検証を目的とし、平成20年度より実践された。

①『物理的に人数が少なくなったために、指導がやりやすくなった』という指導者側に有益なだけではなく、児童の学習効果の内実を明らかにできるカリキュラム開発が必要である。
②従来の少人数教育形態（習熟度別グループ学習等）や教育効果（学力向上等）を目指すのではなく、少人数だから可能な『子どもにつけたい力』『学習効果』をねらったカリキュラム開発を行う。
③これからの集団･社会生活で望まれる『市民性』を培うために、従来、多く実践されていた『少人数教育』よりも優れたカリキュラムや教育方法の可能性・具体例を明らかにする。

少人数の特性を積極的に生かし、「教育効果」をあげるためにもいくつかのねらいを設定した。

次の４点を研究上のねらい(目的)として、カリキュラム開発・教材研究・授業実践を行い、研究を進めた。

①少人数教育（学級）において、児童の学習効果が高まるのか。また、その学習効果の内実を明らかにする。
②少人数教育（学級）において、指導者は学級サイズに対応した指導内容・方法をどのように発展できるのか。その可能性とカリキュラム開発の内実を、生活科の実践を中心に明らかにする。
③少人数教育（学級）における保護者の学習参画（ボランティア）の可能性と効果を明らかにする。
④少人数教育（学級）における保護者・地域の学校・学級評価に、どのような変化が見られるのかを明らかにする。

とりわけ②のカリキュラム開発については、お茶やお花など、日本の伝統文化にリンクするカリキュラム開発に取り組み、「教育効果」については実践を通して変容する子どもの学びの姿の事実から明らかにしたい。

1．2．研究仮説

本研究のねらいを達成するために研究上の仮説を先行研究を踏まえ設定した。

学級のサイズと学習効果は同一カリキュラムを実施した場合、一般的には16名複式→30名単式→40名単式の「順位相関」として現れると指摘されるが（P／スミス・グラフ・1990、八尾坂1998)、現実には必ずしもそうならない場合があるのではないか。それは、学級サイズに対応したカリキュラム編成の独自性が存在するからである。また学級担任の経験や指導力、コミュニケーション力等が、検証結果に少なからず影響を及ぼすからである（2005、西村)。

本研究の授業実践では、研究代表者が各教科主任・学年主任等関係職員との連携を密にしながらカリキュラムを作成し、当該活動への授業者の知識・技能に応じ、経験や専門性を有する保護者（場合によっては地域)、ボランティアを配置し、ティームティーチング形式で進めていくこととする。つまり、同じ指導案・指導方法のもと、担任の経験や専門性を埋めるバランスのよい保護者の教育力の活用により、正確な「少人数教育」の効果について正確にとらえていくとともに、担任個別の力量ではなしえない単元開発の可能性や支援の充実、学習効果について、それぞれ検証することができると考えられる。

1．3．「教育効果」のアセスメント方法

今年度の場合の調査方法は、複式学級（３）･単式30名学級（９）･単式40名学級（９）への参与観察を行う。また適宜担任ならびに指導教員に聴き取り調査を実施する。(本論ではU教員からの聞き取り内容を示す。)

なお、参与観察は、授業における子どもの学びの姿をできるだけビデオ撮影し、変容を具体的にとらえたい。

1．4．研究成果の検証と活用

研究・実践にあたっては、国立教育政策研究所の小松郁夫氏を研究協力者・指導助言者として適宜指導を仰ぐ。また、生活科を主として研究する教諭を授業実践に於ける共同研究者として研究を進めていく。

和歌山大学教育学部附属小学校教科領域等別夏季公開研修会において、実践中間報告を行い成果の普及に努める。また、同校教育研究発表会にて実際の授業を公開するとともに、提案・発表を行い、研究実践に対する示唆を仰ぐ。

2．少人数教育とカリキュラム開発
『和みカリキュラム』

2．1．今こそ、“和”の風を

少人数教育が、従来のシステムよりもどのような優れたカリキュラムや教育方法を生み出せるのか、その可能性とカリキュラム開発の内実を明らかにするため、まず、小学校１年の子どもたちのコミュニケーション能力の育ちと学級集団の人数との関係性に着目した。

小学校入学当初、40人の集団のなかで自分の居場所を見つけ・友だち関係をつくるのはかなりのストレスである。集団のなかで“全体”を見ることができ、“個”を見ることもできる人数として30人は最大限の数であろう。計算ができる・漢字が書ける能力も大切であるが、心地よく周囲の人と関わることができる能力は、一生を通しての宝である。人間関係が希薄になりつつ

ある社会のなかで、今後さらに子どもたちのよりよい人間関係を構築していくための学校教育の在り方を探っていく必要があることは否めない。

また、子どもたちの周辺から消えつつある日本のよき伝統文化・生活習慣のなかにコミュニケーション能力を高めるための教材性があることに着目した。謙虚さが表れている挨拶、季節感溢れ相手への心くばりが見られる室内の設え、自然を愛する心を表現したお花飾り・おもてなしの心が形に現れた茶道等、対象への思いを美しい形式として表現し・伝えられる魅力的で発展的な教材である。

加えて、生活を送る上でのスキル（場に応じた言葉づかい・相手に不快感をもたせない所作等）を身につけ、周りの人々と豊かで心地よいコミュニケーションを生むと考えられる。

これらの観点から、30人の学級集団のなかで“和”の体験・活動を愉しむことで、コミュニケーション能力を身につけることができるという仮説のもと、『和みカリキュラム』を生活科の一つの柱として位置づけ、カリキュラムの構成を行い、実践した。

２．２．目標設定

本年度は、生活科の目標に基づき、『和みカリキュラム』１年目のプログラム目標を設定した。

《生活科の目標》

①具体的な活動や体験をとおして、自分と身近な人々・社会及び自然とのかかわりを深め、意欲と自信をもって生活することができる。

②生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う。

《プログラム目標》

①体験･活動をとおして、よき『日本の生活（衣食住）習慣』『日本の季節感』を取り入れるとともに、『初歩的な礼儀･作法』を身につけ、『好ましい人間関係』を構築することができる。

②体験・活動をとおして、日本文化に触れることで、見聞・見識をひろめる。

③希薄になりがちな人間関係（家族・友だち・地域社会）の営みを、自ら進んで築いていこうとする意欲･態度を養う。

④他教科・領域等との関連を積極的に図り、指導の効果を高める。（図画工作科・食育教育・国語科等）

この、教科目標とプログラム目標の下、１年生と２年生の年間カリキュラムを作成し、授業実践を重ねた。

２．３．カリキュラム開発ならびに教材開発の実際

次の４点をカリキュラムの柱として位置づけ、実践していくなかで、更なるカリキュラムの発展や可能性が見えてきた。

①学習活動のなかで、『和歌山城内の茶室での茶会』や子どもたち主催の『夏祭り茶会』等へと発展していった。地域活動参画の一環として、青年会議所主催『秋季茶会』、ならびに『和歌浦万葉薪能』等にも参加した。

②和菓子作りや菓子皿作りの陶芸カリキュラムの実践も試みた。専門家や大学教員との連携による授業で、子どもたちの学びの質の高まりが見られた。

> 校内に咲く花を活けたり、煎茶や基礎的な茶道、和菓子や箸袋作り体験等、現代生活の中で消えつつある日本のよき自然・季節感、伝統文化、生活習慣等を取り入れたプログラム。

③条件や規制のなかで身につく生活能力の重要性を再認識することができた。

④保護者による学校評価の高まりに繋がった。

３．『和みカリキュラム』実践の概要

３．１．まわりの人々と心地よく過ごすための体験プログラム

心が和む言葉かけや挨拶、美しい立ち居振る舞い・物腰、柔らかな表情など、ちょっとした心の持ちようで人間関係は良くなる。

人間関係の構築に於いて、一人ひとりの子どもの性格や特性が大きく影響するということは否めない。しかし、現代の子どもの様子を見ていると、自分の気持ちを素直に表現するスキルが身についていない（モデルとなる対象が少なくなってきていることも一因か）子もいるのではないかという危惧さえ覚える。

友だちになりたいのに上手に関わることができなかったり、少し気持ちの行き違いがあれば強い口調で相手を攻撃したりしてしまう子どもが増加している。

このような実態から、和みカリキュラムによる実践は、挨拶の仕方・所作、会話の声の大きさ、廊下や部屋の中での歩き方、椅子や畳の上での座り方など、生活上の基礎基本のマナーやルールの学習から始めた。子どもたちは、ごっこ遊び感覚で改めてスキルを身につけていた。

４月当初は、15分間しか出来なかった正座が、３月には、45分間出来るようになっている子どもたちが健気であった。

３．２．自然の草花を生活に取り入れるプログラム

附属小学校は、自然豊かな環境に恵まれている。しかし、足元に咲く草花も、意識しなければ、子どもたちにとっては単なる雑草に過ぎない。意識すれば、自分たちを和ませてくれる自然の恵み・宝物である。子どもたちに、野の草花の価値に気付かせるのが、本実践の目的の一つである。

野の花を身近に飾って、心なごませる時空間を体験するプログラムを四季を通じて実践した。

何の手だてもしなければ、一生単なる雑草に過ぎない草花を、要る分だけ摘んで・飾り・楽しむことで、生活や学習の対象となり得るのである。

３．３．手作り・スロウライフのプログラム

子どもたちの生活から遠ざかっている日本茶。

年中､冷たい麦茶を飲んでいたり､緑茶と言えばペットボトルのお茶と思っていたりする子どもも少なくない。

また、便利で手軽な消費生活に慣れ親しんでいる子どもたちでもある。日常の遊びのなかでも手作り遊びが少なくなっている。

このような実態を踏まえ、和みカリキュラムのなかで、子どもたちが“自分で出来る”喜びを味わえるプログラムを設定した。

自分たちで湯を沸かし・煎茶を淹れ・味わう『日本茶をどうぞ』。季節感溢れる植物や千代紙などで作る『和風小物』。家族みんなのための『正月の祝い箸袋』作り。それぞれが自分の思いで創意工夫し、楽しみながら活動していた。

このような活動から、子どもたちは決して面倒がることもなく､ゆったり活動を楽しめることが分かった。日々の慌ただしい生活では味わえない“和み”の時間を１年生・２年生なりに楽しんでいるようであった。

３．４.『おもてなしの心』を育てるプログラム

堅苦しい作法や我慢を強いる茶道ではなく、日常の生活の場に活かされる『おもてなしの心』を育てるプログラムである。

履物の並べ方から始まり、畳の上の歩き方や正座、挨拶の仕方、お菓子やお茶の頂き方、簡単な作法でのお茶の立て方など、１学期から計画的に実践した。

日本の伝統文化である茶道や華道も、子どもたちにとっては、初めて経験する異文化である。精神性の高い・形から入る“道”の活動に、子どもたちは魅力を感じたようである。

難しく堅苦しいと思っていた活動が、自分でも楽しく取り組め、出来るようになる喜びが、子どもたちの意欲に繋がったようである。

また、これらの学校での活動が家庭に持ち込まれ、家族の団らんの場で再現され、家族のコミュニケーションが深まる、という教育効果も見られた。

３．５．本実践で明らかになった教育効果

少人数で上記カリキュラムのもと学習してきた児童に、以下のことが明らかになった。

①『日本のよき生活（衣食住）習慣』とともに『初歩的な礼儀・作法』を身につけ、『好ましい人間関係』を構築することができるようになった。

②落ち着いた学級集団のなか、他教科の学習にも意欲的に取り組める児童が増えてきた。

初めて経験する初歩的な『活け花』や『茶道』が徐々に出来るようになり、成就感・達成感を生み、自己肯定感へと繋がった。また、30人という規模も、互いを認め合える学級集団として適切である。

人間関係が希薄になりつつある社会の中で、今後さらに児童のよりよい人間関係を構築していくための学校教育の在り方を探っていく必要がある。

４．少人数教育の効果について

ここまで述べてきた「和み実践」を柱に、少人数教育の効果について、**「１．１．研究の目的」**に掲げた４点の目的（ねらい）を評価の視点としてまとめたい。

４．１．30人という少人数が生きる教育効果

指導者側からの利点としては、はじめに述べた40人学級における指導の困難さがずいぶんと解消されたことはいうまでもない。子どもの学びに対する細かいみとりまでが成立し、個別支援が必要な子に対してリアルタイムで行えるようになった。

子ども同士のまなざしの共有も同様である。子どもが互いの良さや課題・活動を知る、伝え合う、取り入れる、相互評価するといった子ども同士のかかわりが濃密になり、子ども同士の支援、協同的な学びがより成立するようになった。

その点においては、少人数になったことで１人ひとりの出番・活躍の場が、これまで以上に保証されるようになったことが大きな要因である。そんな中、１人ひとりが自分の居場所をしっかりと認識し、自信を深めながら表現力を伸ばしている。

本校では、学びの質を高めるため、学習展開の中にペアやグループによる学びの場を設ける機会も多い。２人・15ペア、３人・10グループ、５人・６グループ、６人・５グループ、15人・10グループなど、目的や活動内容によってバリエーション豊かに取り入れることができた。30人という学級編成は、子ども同士の学びの共有・共感、学びの空間が程よい単位であるといえよう。

複式学級（男女混合16名）では、異学年という他要素が加わっているため、今回の研究目的とは多少ずれはあるが、上学年の児童が下学年児に手を貸したり教えたり、逆に下学年児も自ら良さを真似て取り組んだりと､異学年の良さが相乗的に生かされる場面も多い。

異学年・少人数教育は、今後の“少子化・学力保証”の観点から有効な学級編制であると考えられる。

４．２．学級サイズに対応した指導方法・カリキュラムの開発と効果

４．２．１．プログラムからプロジェクトへ

同じ指導案で、基本となるプログラムであっても、細かいところまでみとりと支援が可能であるため、子どもの思い・願い・考え、また学級の実態・ニーズに合わせて活動をひろげたり・ふかめたり・つなげたり、プロジェクト的に学習を展開できた。

もちろん逆に、つけたい基礎的な力が同じであるならば、子どもの実態が多少違っても、個別の支援が充実できるため、プログラムとして授業実践が可能となる場合もある。

４．２．２．幅広い学習対象に向かう実体験の充実

出番・活躍の場が保証される中には、１人ひとりが実際に体験する機会の充実も含まれる。

緑豊かな文化施設に包まれた本校の特筆すべき環境を生かしながら、新学指導要領でも重要視される我が国の伝統文化にもリンクしたカリキュラムを開発し、実感を伴った学びを実現した。

①校庭の草花を摘んでお花を生ける体験カリキュラム

豊かな自然を対象として、自然に寄り添い、活かし、取り込む活動である。草花への興味が意欲となり、対象である自然そのものが教材となり、遊びが学習活動となる。自然のままではなく、対象の特性や生活の場面を考える学びが生まれ、必要な分だけを摘んでお花かざりをするという、いわば自然への畏敬の念、また相手の心の和みを意識して工夫する子どもの姿が見られた。

国語科や図工科ともリンクすることで、様子や心情を表す語彙を増やし、想いにあった色や絵を添えながら、自分の言葉で表現する活動を楽しむことができた。

②日本の伝統文化・生活様式にふれる体験カリキュラム

身の周りから消えつつあり、子どもにとっては異文化・形式美とさえなりつつある日本の伝統文化・生活様式を取り入れた活動をプログラミングした。

まねるという、形から入る学習ではあるが、だからこその自由な発想、特に『条件』・『きまり』・『規制』等の枠のなかから生まれる発想の広がりや活動意欲、活動の継続・発展に期待した。

例えば正座のしんどさが、姿勢のよさの心地よさや心の引き締めへと繋がり、頑張ればできる自分の発見と喜びを知り、子ども自身が自己肯定感を高める機会となった。

また、普段の生活からは少し距離のあるおもてなし、手作り生活（スロウライフ）、花・茶道などの活動の継続により、子どもの意識の中では普段の生活との距離感が縮まり、家庭生活に活かす子どもの姿が見られ、家族間のコミュニケーションがスムーズに行われるようにもなった。そうして、子どもの意識の高まりが、家族や身近な人々へとひろがりを生む姿もあった。

そんな中、父母など家族も知らないこと・できないことを自分はできるようになったことでの自信や喜びが、次の活動からのさらなる意欲となり、「もっとおもてなしをしたい。」という、よい意味での『自己主張』『自己顕示』にもつながった。そこには、相手に満足してもらうことで自分が満足できるし、できる自分を見てもらいたい・認めてもらいたい。そのために、おもてなしの対象に応じ、よりよいおもてなしの方法を主体的に考える、生活科としてのスキルを身につける学びの質の高まりも生まれた。

もちろんこれらの活動の結果として、子どもたちの日常生活の立ち居振る舞いには落ち着きを感じるし、挨拶や基本的な生活習慣・マナーの面においても向上が見られた。

４．３．保護者の学習参画・教育力の活用

茶道・華道といえば、ある程度の心得が必要となる。先にもふれたように、誰もがカリキュラムに位置づけ、簡単に指導できるものでも、指導するものでもない。せっかくの保護者の知識・技能を生かしてもらい、教育力を発揮してもらうことで実現するカリキュラムを積極的に取り入れることで、担任だけでは実現できなかった子どもたちの体験の場をひろげ、学びの質を高めることができた。

少人数教育において、子どものみとりと支援を充実できるという教育効果については述べてきたが、同時に複数の子どもやグループが体験活動を行う際には、さすがに限界がある。保護者の参画により、子どもたちの普段の生活からは距離のある内容においても、複数の目でみとり、複数の手で支援することによって、１人ひとりの有効な体験活動が保証された。

とりわけ火を使ったり包丁や湯を用いたり、危険を伴う活動での目配り気配りは貴重であり、保護者の教育参画なくしては現実味のない体験活動をもカリキュラムに位置づけることができた。

４．４．保護者・地域の学校・学級評価の変化

和みカリキュラムを話題に、家族のコミュニケーションが弾み、子どもの学習活動が伝わってうれしいという声は、保護者の方からも聞こえてきた。もちろん、学校での活動を家庭でも生かして実践し、お茶を

入れてくれたり花を飾ってくれたりしたという喜びも伝わって来た。学習したことが生活に生かされる場面を目の当たりにできた保護者の喜びである。

子どもたちの落ち着きに対しての評価も高い。家庭だけではなかなか身につけさせられない、生活の基礎・基本の学習に対する取り組みへの信頼感を実感している。

そうした影響からか、今年度は和みボランティアのメンバーは倍増した。保護者自身も自らの資格や技能を生かし、子どもの教育活動に参画することへの主体性・意識の高まりが実感される。

同時に、図書ボランティアとしての参画も増えてきている。その活動の中心は読み聞かせであり、30人という少人数を前にしての読み聞かせは負担も少なく、子どもとの心的な距離も近い。本来あるべき読み聞かせの姿に近い形で、意欲的に行っていただけていると感じている。そんな中、子どもたちの読書活動も盛んになってきている。

少人数教育の中、子どもたちは、これら豊かな体験を通して発想力を培い、１人ひとりが自分の居場所を認識し、安心できる人間環境の中、伸び伸びと自分の考えを伝え合う機会をもちながら、互いに表現する意欲や力を高め合っている。加えて指導者は、様々な観点から子どもの学習活動を細かくとらえ、評価活動を充実させ、それを次からの１人ひとりの子どもの学習活動に生かす指導が実現しつつある。例えば書写や作文など、子どもたちの成果物に対して、これまで以上に指導者がじっくりと向き合い、その良さや課題をしっかりととらえ、丁寧でかつ適切なコメントを書き添えることもできる。そんな積み重ねが実を結んでか、書写や作文コンクールにおいては、児童才能開発作文部門の部で文部科学大臣賞を受賞する児童を輩出するなど、上位に入賞する児童が順調に増えてきている。新聞やテレビなどメディアでも取り上げられたこともあり、保護者にとどまらない地域の人々からも、少人数教育の「教育効果」や特色あるカリキュラムの開発への関心は高く、学校への評価も高まりを見せている。

４．５．実践の検証

低学年、とくに１年生の子どもたちが、一番はじめの人間関係をつくる集団が学級である。40人の集団のなかで、自分の居場所を見つけたり、友だち関係をつくるのには、大規模な集団である。

30人は、低学年の児童にとっては、全体を見られる個人を見られる集団として、適切な人数である。

保護者の評価

①少人数学級に関して

○適正人数である：一人ひとりの学びの保証・よりよい教室環境・学習環境

○カリキュラム開発への関心：少人数に合った学習プログラムの可能性に期待

②『生活科・和みプログラム』に関して

○子どもたちが、進んで活動している姿が見られることへの評価

○少しずつ、生活のなかに学習したことが活かされていることへの評価

○家庭では、なかなか身につけさせられない生活の基礎・基本の学習に取り組んでいることへの評価・信頼感

○『和み』プログラムの活動をとおして、家族のコミュニケーションがよりひろがる・ふかまることへの評価・信頼感

○『和み』プログラムをとおしてひろがる「保護者参加」の拡大への評価・期待

○『和み』プログラムからひろがる地域住民やボランティアの方々とのコミュニケーションに対する評価

５．外部評価による検証

今回の少人数学級の実験研究に対して、本校の職員による内部評価だけでなく第三者評価を導入することにより「評価の客観化」をはかった。

評価者は当時、国立教育政策研究所研究部長（現在玉川大学教職大学院教授）の小松郁夫氏に依頼した。氏には一年目に和歌山までご足労いただき教室を観察していただくだけでなく、１年生の担任教員との懇談会をおこなった。その際のアドバイスを生かす形で２年目には科学研究費（奨励研究･代表梅本）により「少人数教育の教育効果とカリキュラム開発に関する研究」を実施した。

この実験研究は２章～３章に紹介したとおりである。この実験研究結果を中間的にまとめ２年目の秋には東京において小松氏に報告をおこない、評価していただいたのが下記の内容である。

５．１．小松郁夫氏による実践評価

貴校の実践研究『少人数教育の「教育効果」とカリキュラム開発に関する研究』に関して以下のように評価するとともに、当方の若干の感想を述べさせていただきます。なお、この評価は一昨年当校への訪問調査結果、ならびに東京（KKR東京）で実施した当校からの報告会（12月５日）の内容にもとづきおこなうものです。

⑴基本評価

一昨年、附属小学校を訪問した際に、私は「少人数教育」研究に関して、クラスサイズが小さくなることによって教師の仕事が楽になるという観点からの研究では不十分であること、むしろ少人数の利点を生かしていかなる教育実践が構築できるのかがポイントである点を強調させていただきました。

今回、貴校の報告を聞かせていただき、小学校１・２年生の少人数学級での「和みカリキュラムの創造と実践」は、まさに私の指摘どおりの実践研究が構築されており高く評価するものです。

その根拠は梅本教諭の報告にもありましたように、

第１に学習に参加した多くの子どもがこの授業を「楽しい」と語っていることです。第２にカリキュラム開発者を中心に学級担任との協力教授組織が効果的に組み立てられており、先生方自身が取り組みに手ごたえを得ていることです。第３は多くの保護者から授業に対する好評を得ていることです。

⑵カリキュラムの独創性について

このような教育効果をもたらした背景には、今回の『和みカリキュラム』が附属小学校の環境を最大限に生かした独創性に富んだものであったからだと思います。沢山の草花を使った生け花のカリキュラム、畳の部屋や畳敷きなど『畳』を活用したお茶のカリキュラム、また、何よりも保護者の協力を得ることができるカリキュラムを創ることができたからです。

一見、お茶やお花は子どもの生活感覚から遠い存在であるように思われますが、実はそうではなく今回の取り組みで明らかになったように、子どもの気分を和ませ、仲間関係をつなぐとともに、保護者や教員の関係もつなぐ要素を内包していたのです。それに気づかれた本研究実践は高く評価できるものです。

⑶これからの少人数教育について

ご存知のように、産業社会から知識基盤社会への変化のなかで、教育の質的向上をはかる学習環境の改革は世界的な流れになっています。

例えば、貴校でもペア学習やグループ学習などが取り入れられているように、少人数という学習環境は、従来の一斉学習の形態から共同学習へと学習形態をも変化させています。しかしながらそこでの学習カリキュラムが少人数の学習形態と対応して改革されているかといえばそうではありません。依然として一斉学習におけるカリキュラムが使用されている場合が多いのです。今回の附属小の『和みカリキュラム』の開発はその点で、少人数の学習環境にマッチングしたものであります。最後に少人数教育の実践研究がいっそう進み、貴校の学校改革が発展することを心より期待しています。

おわりに

「附属学校は20年以上遅れている」と指摘したのは、本校に３カ年間指導に足をはこんでいただいた佐藤学氏の言葉である。実際に全国の附属学校のほとんどが地域の古典的なエリート学校として延々と命脈を保っているのが現実である。もちろん研究学校として全国の教育研究をリードしている学校もあるが､340ほどある附属の大半が「ガラパゴス化」している点はいなめない。

その一つが、多くの附属学校は、40人学級(定数法)の枠組みと現実との乖離に矛盾を感じつつも、制度を保守するいわゆる守旧型の価値観に囚われているところが多く、改革に歩みを踏み出している学校は２割程度である。(教育大学協会全国附属学校調査報告2009年５月)

しかしながら、いくつかの教育学部では､「独立行政法人化」を契機した「中期計画」に附属学校改革を位置づけることにより実験的研究に踏み出したのである。

本校もその一つであるが、今回の「少人数教育」研究の特質は、第一に学級サイズの縮小（40人から30人の学級）とカリキュラム開発を関連させたこと、第二に少人数教育の効果について内部のアセスメントと評価だけでなく、外部の評価（小松郁夫評価委員）を導入したこと。第三に、そのために学長裁量経費をはじめ科研費の導入を背景に研究をすすめることができたことにある。

この研究をさらに今後３カ年間継続し名実共に30人学級の実現をめざしたい。さいごにこの附属学校の実験研究に関して、本年２月末、文部科学省大学評価委員会から高く評価されたことを附記しておく。